特集 必要としているあなたのために

声を上げることの大切さ、それに応えてくれる方の多さに驚く

ても喜んでいただきました。「今までは、欲しいものを聞かれても実際には届かなかったから」という声もありました。

「避難所生活で自分が必要としていた物を支援してくれる日がくるなんて信じられなかった」「生きる力をもらいました」「いつか恩返しがしたい」と言ってくれた方もいました。

7月に行った2回目の支援物資は下着類が中心。6月下旬の猛暑の中、何百枚とある下着を熱中症になる寸前になりながら仕分け、中に入っている下着が見えないように、エコクーラーバッグに入れて渡しました。

仮設住宅の支援を最後に、「えがおねっと」を解散

「えがおねっと」としての活動は、当初の計画では一回限りの物資支援で7月末に解散する予定でした。ただ、この後に「口紅を支援物資として渡してほしい」と支援金をお預かりしました。そこで9月には、市内の仮設住宅の女性一人一人に希望色を聞き、158本の口紅を手渡すことができました。

宮城学院女子大学の浅野富美枝教授らが、男女共同参画の視点から東日本大震災における県内の女性たちによる支援の取り組みをまとめた本「女たちが動く（編著者：みやぎの女性支援を記録する会／発行：生活思想社）」。須藤明美さんら「えがおねっと」の取り組みは、この本でも紹介されています

仮設住宅には登米市以外の避難所から来られた方も入っていたので、「初めて『えがおねっと』を知った」という方も多く、「今まで100円ショップの口紅しか使っていなかったけど、これでメーカー品の口紅が使える」とすごく喜んでいただきました。

今年3月には、仮設住宅の被災女性の自立支援に役立てていただきたいという申し出があり、市内にある仮設住宅の集会所にミシンとアイロンを送りました。そして、3月31日をもって「えがおねっと」は解散しました。以上が11カ月に及ぶ「えがおねっと」の活動の軌跡です。

私は農家の嫁です。今回「農家の嫁でも何か役に立てることがあれば」と家族の協力のもとに「えがおねっと」というかたちで外に出て活動し、貴重な体験をさせていただきました。家族には負担をかけましたが、本当に感謝しています。

初めてのボランティア。この活動を通して私たちも避難女性たちも、自分が困難な状況に置かれたとき「声を上げることの大切さ」を学んだのはないでしょうか。そして、それに応えてくれる方が多いことにも驚きました。今まで一人一人で生きていると考えていたところもありましたが、このような活動をして、みんなどこかでつながっているんだなと実感できました。

自分に何ができるか、一人一人が悩み、考え、行動した

昨年3月の震災当時は、企画部市民活動支援課で男女共同参画推進を担当していて「えがおねっと」結成後は事務局的な役割を担いました。

「えがおねっと」は女性被災者一人一人に寄り添った物資支援に努めました。女性視点の物資支援は、立教大学の萩原なつ子教授から企業などに支援提供を呼びかけていただき始まったものですが、支援物資の中には「えがおねっと」のメンバーが自分の知り合いに働きかけご提供いただいたものも数多くありました。

当初は一回の支援で3カ月程度の活動の予定が11カ月も続いたのは、彼女たちが「自分に何ができるのか」を真剣に悩み考え、それぞれの思いを込めて行動につなげた結果だと思います。

米山総合支所市民課
三浦 徳美（とくみ） 課長補佐

外部から見た「えがおねっと」の取り組み

宗片 恵美子（むなかた・えみこ）
特定非営利活動法人イコールネット仙台 代表理事
仙台市男女共同参画推進センター エル・パーク仙台 市民活動スペース スタッフ

私が所属するイコールネット仙台は、男女共同参画社会の実現に向けて幅広い活動に取り組んできました。

震災後、避難所の女性たちのニーズを把握するため、登米市役所の市民活動支援課に手配していただき、お見舞い訪問というかたちで市内の避難所を回らせていただきました。

避難所は、どうしても男性リーダーの視点で運営されがち。そのため、女性たちが「非常時だから」ということで、我慢を強いられているケースが多いのです。想像はつきますが、実際に避難所に行って女性たちの生の声を聞くことで、その後の具体的な支援につながりました。

「えがおねっと」は被災女性一人一人に寄り添い、彼女たちが震災前、当たり前に手にしていたものを支援物資として提供しました。化粧品メーカーと協力し、被災女性のためにフェイスマッサージやハンドマッサージを提供する取り組みも展開しました。この震災で悲痛な経験をした女性たちにとって、かつて自分を取り巻いていた品々を手にすることは、日常を取り戻す、よりどころになったことと思います。

避難所で聞いた女性たちの声が、その後の支援につながった

NPO法人 イコールネット仙台
宗片 恵美子代表理事

市民協働、男女共同参画のモデルケース

浅野 富美枝（あさの・ふみえ）
宮城学院女子大学教授（家族社会学）
特定非営利活動法人イコールネット仙台 理事、登米市男女共同参画審議会会長、気仙沼市男女共同参画審議会委員、栗原市男女共同参画推進委員会委員、財団法人みやぎ婦人会館理事

登米市の「えがおねっと」は、自治体の男女共同参画の取り組みから端を発し、その実践として市民協働で取り組まれたケースです。

「えがおねっと」の活動は、震災前から行っていた登米市の男女共同参画の活動が生かされたもの。彼女たちが、市の男女共同参画推進条例を策定していく中で勉強したことを実践に移したといえます。

彼女たちは研修を重ねていく中で、震災の被災者一人一人に寄り添った支援が必要と感じ、それを実践しました。自分たちで考え、自分たちで決定し、自分たちで創意工夫しながら行動したのが大きな特長です。今回「えがおねっと」が取り組んだ被災者支援のノウハウは、登米市にとっても大きな財産といえます。

「えがおねっと」を語る際に忘れてならないのは、「えがおねっと」が市民と行政の協働の結実であり、同時に登米市を超えた多くの人と団体のネットワークのたまものだということです。そういった意味でも「えがおねっと」の取り組みは、市民活動の一つのモデルケースといえるのではないでしょうか。

宮城学院女子大学
浅野 富美枝教授